

2015年5月3日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書9章18～22節

説教 「イエスを何者だと言うのか」 日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松 牧人

ペトロが弟子たちを代表して主イエスに対して信仰の告白し、それに続いて主イエスが初めて弟子たちにご自身のこれから行くべき道について、すなわち苦難と死と復活についてお語りになるという場面は、福音書前半の頂点となる箇所です。ルカは主イエスの力強い御業が展開し、弟子たちも人々も、さらに領主ヘロデまでも、「いったい何者だろう」と言い始めていたことを報告していました（7：49、8：25、9：9）。そうした中で、主イエスが5つのパンを2匹の魚を取って配られると男だけで5000人の群衆が皆満腹したという野外の祝福された食卓が開かれるのです。そして、その興奮も冷めやらぬうちに、ルカは頂上に一気に駆け上がるように、弟子たちが主イエスを「神からのメシア」と呼ぶに至ったことを書いているのです。

ついにそのような重要な場面に辿り着いたのですが、ルカは「イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた」と書いています。何ということもない一文ですが、ここにもまたルカの特徴が出ています。ルカによる福音書は、要所要所で祈る主イエスの姿を描いてきました。主イエスは洗礼に際して祈られ（3：21）、弟子たちを選び出されたときも祈って夜を明かされたのでした（6：12）。主イエスの公生涯は初めから終わりまで、十字架上で「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という最後の言葉まで祈りに貫かれていた。ここでも主イエスは祈っておられるのです。

それにしても、主イエスがひとり祈り、弟子たちは共にいた、という表現はいったいどういうことなのでしょう。弟子たちも一緒にいて祈っていたかもしれないが、主イエスは弟子たちの知らない孤独な祈りの戦いをしておられたということではないでしょうか。

主イエスは何を祈っておられたのでしょうか。それはまず、野外の祝福された食卓を経験した弟子たちと多くの人々が主イエスに対していよいよ大きな期待を持つようになったこのとき、ご自分がこれから歩まなければならない道をしっかりと見定めようとしておられたのではないのでしょうか。主イエスはやがて十字架を目前にしてオリーブ山で「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」（22：42）と激しく祈られますが、その祈りの戦いがここでもう始まっているのです。

また主イエスの祈りは、弟子たちがつまづくことなく従ってこることができるようにという祈りでもあったのではないのでしょうか。弟子たちが信仰を言い表すなら、今こそ主イエスはこれから自らの歩むべき道を弟子たちに打ち明けようと決意しておられたに違いありません。その道は前途洋々とした王道ではなく、苦難を通して栄光へと至る神の僕の道です。それは弟子たちが容易に理解できる道ではないのです。後に、十字架が間近かに迫って来たとき、なお強がりやを言っていたペトロに主イエスはこう言われました、「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを

神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(22:31~32)。ペトロと弟子たちの信仰が無くならないようにという祈りが、すでにここで始められていたに違いありません。

こうした祈りの後で、主イエスが弟子たちにお尋ねに問いは、したがって思いつきでも興味半分のものでもありません。主イエスは父なる神の御心に従い御自分の進むべき道へと思いを固められて弟子たちに問われるのです。「あなたがたはわたしを何者だというのか」。他の人はともかく、あなたがたは私を誰だと言うのか、信じるのかというのです。

それに対するペトロの答えは「神からのメシアです」というものでした。短いけれども、弟子としての初めての信仰の告白であり、世間の人々のする噂とは全く次元の違う答えでした。メシアをギリシア語に移すとキリストすなわちキリストになりますが、これはもともと香油を注がれた者という意味です。昔、イスラエルで神から特別な務めを授かった者、具体的には王や預言者や祭司に香油が注がれ、祈りがなされ、聖別の儀式が行われたことに由来する言葉です。そして、主イエスの時代、この言葉は王、預言者、祭司の務めを一人で引き受け、神の救いの業を実現する救い主を意味するものとなっていました。ペトロは「あなたこそ神が遣わしてくださった救い主です」と答えたのでした。

主イエスはこのペトロの告白を受けて、間髪を入れずに、弟子たちを戒め、このことをだれにも話すなと言われ、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」(22節)と続けられました。神のメシアと言うだけでは意味がないのです。むしろ誤解を招くことになりかねません。十字架の下で嘲る人々は、主イエスに対して「もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい」(23:35)と言ったのでした。「神からのメシア」とはそれ自体間違いのないことですが、主イエスは必ず多くの苦しみを受け、人々から排斥され殺されることにおいてメシアなのです。ご自身のいのちを注ぎ出すことにおいて、神から遣わされた使命を全うされるのです。

主イエスと言ひ、イエス・キリストと言うことは、私たちの最も基本的な信仰の告白です。けれども、そう唱えることで止まっただけではなりません。主イエスはどのように歩み、何をしてくださったのかを問い続け、その招きに従っていきたいものです。